

【小島守夫氏】

会員番号 6189

2020年2月14日逝去

享年80歳



1940年宮城県石巻市生まれ。
日本山岳会栃木支部設立会員。
15歳から山歩きを始める。
宇都宮大学入学以来栃木県人となる。
大学在学中は山岳部に所属、卒業後は
栃木県庁に入庁。

1967年には栃木県山岳連盟20周年記
念事業として南米アンデスの親善登
山に参加、キムサクルス山群4峰に初
登頂。

その後栃木県山岳連盟理事長、副会長、
会長を歴任。

また栃木県山岳遭難対策協議会会長
として、栃木県の『山のグレーディン
グ』作製に尽力。

またその幅広い人脈を活かし、多方面
で活躍されており、HAJ、HAT-
J、JMCA(日本山岳文化学会)会員
として活動。

【坂口三郎氏】

会員番号 7973

2021年11月20日逝去

享年94歳



1926年、福岡県若松市生まれ
1938年、福岡県立小倉中学校(旧制)
1943年、海軍兵学校(広島県江田島第
75期) 在校中に終戦
1948年、宇都宮市において水産卸事
業を経営
1965年～1981年、栃木県山岳連盟理
事長
1975年6月、日本山岳会入会
1982年～1999年、栃木県山岳連盟会
長
1995年～2001年、日本山岳協会会長
2001年、叙勲(勲四等瑞宝章)
2007年5月、日本山岳会栃木支部設
立発起人
2021年11月20日、94歳にて自宅で
永眠



◇◇◇ 追悼 故 小島守夫氏 ◇◇◇

追悼 小島守夫さん 石澤好文

小島守夫氏 会員番号 6189
(1940.3.14~2020.2.12 享年 80)

- (公社)日本山岳会栃木支部は、2007年5月設立されました。支部創立の機運が高まる中、県内在住の日本山岳会会員に呼びかけ、設立に向け2007年1月に初代支部長日下田實氏を発起人代表として10数人の有志が集まり設立に向けた会合を持ちました。当時栃木県山岳連盟会長であった小島氏にも発起人として設立に多大なるご尽力を頂きました。なお小島氏の日本山岳会入会は1966年で、加藤泰安、黒崎邦夫両氏の紹介で入会された会員番号6189の会員です。
- 設立後は、支部会委員、山行管理担当委員として、豊富な登山経験をもとに支部活動に貢献して頂きました。特にマスターズクラブの山行には適切な助言、指導を頂くと共に山行に同行して頂き安全登山を実践することができました。
- 他にも本支部の各種事業に参加いただき、特に事業後の懇親会には、お酒を飲まないのにも関わらず毎回参加され、楽しい中にも思慮に富んだ山の話をお聞きすることができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。
- 小島氏は2019年11月に開催された栃木県スポーツ振興課主催の講習会に参加され、開会直前に倒れ入院されました。2017年、2018年と大手術をされ入院生活をされましたが、退院すると古賀志山や里山にリハビリと称して積極的に登山をしたり茨城国体に観戦したりしておりました。その驚異的な回復力には驚かされました。今回もすぐに復帰されると思っていただけに残念でなりません。

- 宮城県石巻出身の小島氏は宇都宮大学に入学以来栃木県人として大学在学中は山岳部に所属し、卒業後栃木県庁に入庁されました。1967年には栃木県山岳連盟20周年記念事業として南米アンデスの親善登山に参加しキムサクルス山群の4峰に初登頂されました。その後栃木県山岳連盟理事長、副会長、会長を歴任されました。また栃木県山岳遭難対策協議会会長として、栃木県の『山のグレーディング』の作成にご尽力されました。また、その幅広い人脈を活かし他にも多方面で活躍されておりHAJ、HAT-J、JMCA(日本山岳文化学会)会員とし活動されておりましたが、これらの活動については割愛させていただきます。
- 1月22日に開催された「山」の講演会に出席され、懇親会まで参加され元気な姿を拝見するのが最後になってしまいました。まさかこんなにも早くお別れしなければならないとは思ってもみなかっただけに残念でなりません。どうぞ安らかに眠りください(合掌)。



小島守夫さんを偲ぶ

日本ヒマラヤ協会 理事長 伊東 満

- 小島さんが亡くなられてから 2 年近く経とうとしている。コロナ禍で親しい方々と小島さんを偲んで語りあうこともできず寂しい限りである。
- 小島さんとは時折電話で近況などを伝え合っていたが、2019 年の春ごろ、自らの病状の事や奥さんの介護のことなどをざっくばらんに話してくれた。聞き及んだ病状に対して何と答えてよいのか言葉がなく、「長年登山をして来たのですから基礎体力はあるはずです。頑張ってください。」としか言えなかった。その内にお見舞いに行かなければと思いつつ月日がたち、2020 年の 2 月に訃音を受けた。早くお見舞いに行っておればよかった、と悔やんだが時すでに遅しであった。
- 小島さんは 1970 年 2 月に日本ヒマラヤ協会 (HAJ) に入会、会員番号 291 である。入会時の「ヒマラヤへの関心を持つ事柄」について、「山そのものも当然として、その地方の風俗、植物のことについて勉強したい。」と書かれている。宇都宮大学農学部出身たる所以と言えよう。栃木県庁退職後インドで農業指導にあたられたのも頷けるところがある。
- 私が初めて小島さんにお会いしたのは、HAJ の研究会である。「Expedition 研究グループ」に加えてもらった時であった。と思っていた。しばらく経ってから「アンデス会議の時の写真だよ」と日光の中禅寺湖畔の幸子荘で開催された「日本アンデス会議」に参加した時の集合写真を持って来てくれた。私は記憶がなかったが、既にお会いしていたのだった。
- HAJ では 1984~1995 年の間に理事を、

1996~2004 年の間に評議員を務めていただいた。理事になっていただいていた時期は HAJ の最も活動の華やかなりし時期であり、中国、インドを主に毎年数隊の登山隊を派遣し 10 峰に初登頂している。会運営にご尽力をいただいたことに感謝の念に堪えない。

- HAJ は初期の活動期、「Exp 研」が主体となり 1974 年ラムジュン・ヒマール、1975 年ヌン及びリシ・パハール、1978 年バツラ IV に登山隊を派遣しているが、小島さんはヌン、リシ・パハールの登山隊の事務局を引き受けられ、バツラ IV も含めて三つの登山隊は調達物資の集積・梱包の場として自宅を使わせていただいた。梱包の時は多くの隊員が泊まり込みで集まる中、奥様には作業場所の提供のみならず食事の世話までしていただき手を煩わせた。
- 1978 年から HAJ は「登山学校」を開設していたが、小島さんは 1981 年のナンダカート登山の隊長を引き受けられた。ナンダカート登山隊は頂上アタックを目前にして雪崩により隊長を除く 7 名の隊員が遭難するというアクシデントに遭遇した。小島さんは HAJ での自身の活動の中で最も苦労されることとなってしまった。私は遭難の連絡が入った翌日、現地での連絡要員としてインドに向かい、状況報告のために下山する小島さんをピンダリー川のカプコットで出迎えた。やつれた姿であったがデリーまで戻り IMF や日本大使館への状況報告、救助・捜索に関する調整等を精力的に行い、再び BC へと引き返えして行かれた。
- この遭難に対しては、遭難発生直後に ITBP (インド・チベット国境警察) の救助・捜索隊が派遣され、また、HAJ 派遣の捜索隊による集中的捜索も行われたが、結果的に

は成果を得ることは出来なかった。小島さんの苦悩、それに対する奥様の心の支えを私は推し量ることもできない。この時ITBPの搜索支援を享けたことが契機となり、ITBPとHAJの関係は深まり、その後の東部カラコルムやシッキム・ヒマラヤでの合同登山の道へと繋がり、多くの成果を上げることとなった。

- 小島さんの活動はHAJに限らず、栃木県岳連、日本山岳文化学会でも尽力されていた。HAJでは2005年から、日本山岳文化学会と共同で「山の文化地方講演会」を開催してきた。これは、山岳に関する講演会・研究会は首都圏に比べ地方においては開催の機会が少ないことから、地方岳連との共催により実施しようとするものである。小島さんは2013年から日本山岳文化学会の常務理事となられ「講演部」を担当されることとなり、「山岳文化地方講演会」についてHAJとの共同事業に携わることになった。この事業では、小島さんの県岳連事業を通じて張り巡らされている人脈に大いに助けられることになった。それまで一本釣りの共同開催県岳連を絞り交渉して開催地を決定していたが、小島さんの何処と何処の岳連にはどうゆう人物がおり講演会等に関する理解が深い。岳連の状況からすると開催の順序は何処の岳連を優先した方が良い。と的確なアドバイスにより、それまで開催地は東日本が多かったが岡山、香川、福井などの西日本まで広がり、数年先までの開催見込地の道筋を付けていただいた。しかし、残念ながらコロナ禍で2020、2021年は実施に至っていない。
- 小島さんは酒を一滴も飲まれなかった。でも酒席を断ることはなかった。短髪でいつも笑顔を絶やさず、穏やかに接する姿を今でも思い出す。

小島守夫さんを偲んで

日本山岳文化学会 会長 酒井國光

- 小島守夫さんの余りにも急なご逝去で、当学会にとっても非常に有意な人を失ってしまい、残念至極です。当学会会員一同心から哀悼の意を表します。
 - 小島さんを偲んで、まず当学会との関わりについて思い返してみます。日本山岳文化学会は「山岳文化に関する調査、研究、保護、保存と振興及び普及を目的」として2003年3月8日に発足しました。小島さんは創立発起人の一人で、会員ナンバーは36番です。発足時から4期8年間(2003年度～2010年度)評議員として、学会を側面から支えていただきました。さらに2011年度から2年間は理事、2013年度から2018年度までは常務理事として学会運営の要になってご尽力いただきました。小島さんが中心となって進めたのは講演会部の「地方講演会」開催です。この講演会は、発足当時無名の当学会の存在を広く登山界に告知する目的で、各都道府県山岳連盟(協会)、日本ヒマラヤ協会(以降HAJ)、当学会の三者共催で実施してきたものです。小島さんは栃木県山岳連盟の要職の経験を生かして、各都道府県山岳連盟(協会)の役員と協議して講演会を立ち上げてくれました。小島さんの在任期間中に成立した地方講演会は、次の6つです。どの講演会も中身の大変濃いものでした。
- 2013. 10. 27-28 山の文化 in Toyama、富山市
 - 2014. 10. 13 山の文化 in Yamagata、米沢市
 - 2015. 10. 25 山の文化 in Ibaraki、水戸市
 - 2016. 10. 16 山の文化 in Okayama、岡山市
 - 2018. 2. 4 山の文化 in Kagawa、高松市
 - 2018. 10. 21 山の文化 in Fukushima、白河市
- もちろん栃木県山岳連盟さんには、2011年度の第6回地方講演会を「山の文化 in Tochigi」としてご協力頂きました。会場は栃木県青年会館「コンセーレ」、参加人数は67名ですからほぼ満員。開会挨拶での小島さんの嬉しそうな笑顔が忘れられません。
 - 次に、小島さんと私の強烈な出会い(と自分では思っている)についてお話しします。「小島さんははっきり物を言うので怖い人だ」と言うのがその時の私の印象です。それは1987年の暮れの頃、日本山書の会の

忘年会であったと記憶しています。

○旨酒をかなり飲んだ頃、個人の近況報告などを話す番が回ってきました。私は所属する昭和山岳会の50周年記念事業で、(次の年の)5月からパキスタンのブロード・ピーク(8,047m)に隊長として遠征することが決まっていた。そこでその登山のことを話しました。かなり飲んでいて私ですから、たぶん「48歳で頂上に登りたい」などと言ったのでしょうか。そうすると横に長いテーブルの端の方から聞こえてきました。

「8000m 峰に挑戦しようとする人間がこんな所で酒など飲んでいて登れるはずがない」と。ギクっとしましたね。私にとって海外登山は7回目になります。確かに8,000m 峰は初めてですが、6,000m 峰には3回行っています。頂上にも登っています。どの隊でもBCまでは結構飲んでいました。当然と言うか、今度の隊でも約5,500mのBCまでは酒を禁止にするつもりはありません。登山隊出発の半年も前から「禁酒にしてトレーニングに励め」などという考えは私にはありません。要は考えの違いと言ったらよいのでしょうか。しかし、当人を前にして「登れるはずがない」とはつきり物を言う人はあまりいませんね。この人は何だろうと強烈に思いました。その時はかえって「よし、必ず登ってやるぞ!」との気持ちを強くしたことを覚えています。

○もちろんその時、小島さんについては「HAJの重鎮」で、また「酒を一滴も飲まない人」だということは知りませんでした。結果的にこの登山は成功し、5人の隊員のうち4名が登頂、48歳の私もその中の一人でした。

○帰国後私はHAJに入会し、小島さんとは親しくお付き合いさせていただきました。またHAJでの海外登山にも10回(その後トレッキング隊には5回)参加し、隊長を9回経験しました(1回は隊長代行)。どの隊もBCまでは楽しくお酒を飲みました。海外登山の成否の一つに、「いかにして隊員間の和を図るか」があります。そしてその手段の一つに「酒」があると呑兵衛の私は信じています。天国の小島さん、近々そちらでこの議論をしましょうか…。

○最後にもう一つお話しします。私の父親(没後40数年経つ)は、栃木県さくら市上阿久津(現在の表示)の生まれで、旧姓小林と言います。生家の裏に鬼怒川が流れています。子供の頃は親父の背中に乗せてもらい鬼怒川を(泳いで)渡ったことが何度もありました。

○生家を継いでいる私の従弟(親父の長兄の長男)の長男に小林俊夫が居ます。大学時代は私の家(川崎市)の近くに下宿していました。その時に私の母親が多少の面倒をみたのでしょうか。母は2008年に97歳で逝去しましたが、その直後お悔みに来宅してくれました。その折自費出版した本(と「トチオトメ」など)を持参してくれました。曰く「私は大学を出て栃木県庁に勤務し、小島守夫さんに山登りの手解きを受けた」云々。後輩として指導を受け、楽しく一緒に登ったようですね。人間、どこでどんな縁があるかわかりません。私、俊夫の親戚の一人としてお礼を言わせていただきます。小島さん有難うございました。

○小島守夫さん、どうぞ安らかにお休みください。(2021.12.25記)



2011年開催の『山の文化 in Tochigi』

追悼 小島守夫さん 村田美代

- 私は小島さんとはあまり接点は少なく、山岳会へ入っていなければ知ることもなかったと思います。
- 長靴を履き、どこぞへキノコや山菜でも採りに行く風情。山に登る方とは思われないうような…。
- ある時、山の行事で歩いていると、30代の女性の方二人から声をかけられ、小島さんと楽しい山行にまた共に行きたいとの誘い。どこの山岳会にも所属していないという小島さんを、自分たちの山岳会へ入って下さいと熱心に…。煙に巻いたような返事で、気の毒になり、同情してしまいました。（まさか山岳ガイドを書かれていることは知らない様子）お人柄なのでしょうか、偉そうでもなく、構えるわけでもなく、誰とでも話しをしてくださる方でした。
- 山登りの経験の少ない私は、山岳会に入ってあまり山行がないことを聞いたら、それなら自分たちで行くんだよ…とのつれない返事。

- 何処の山へ行きたいかと聞かれ、せめて膝元の日光と答えると、苦笑しながらお安いご用だよと。即座に鳴虫山へ行きたいとの申し出に、こころよい返事。心待ちにしていました。
- ある時、山行報告の連絡をした折、入院中との返事。取りあえず見舞いへ。元気になっておられました。どこが悪いのかと聞いてしまったくらい…。退院したら必ずお茶しようの誘いに、楽しく首を長くして待っていたのに、梨の礫。そんな筈は無いと調べると、訃報の文字。人の縁は切ないものです。宮城県のご出身で、十代半ばより山歩きをしておられたとのこと。長靴のルーツはそのあたりにあるのかもしれませんが。
- 小島さん、先日の山行で念願の鳴虫山へ行ってきました。有名な山より、誰でも受け入れてくれる、そんな身近な山が好きです。小島さんもそんな方でした。
- ご自分がこの世に居ないことがわかった時、誰より驚いたのはご自分だったのではないのでしょうか。ご冥福を祈ります。



不屈の山岳知識人「小島守夫さん」 ありがとう！ 栃木支部長 渡邊雄二

○令和2年(2020年)1月26日、栃木支部の「役員会」、「山の講演会」、「新年会」をコンサーレで実施した。小島さんは、体調を崩して宇都宮市内に入院中であったが、翌27日に退院することになっていたの、病院から参加した。入院中もお元気でしたのでいつもと変わらずの様子でおしゃべりをしながら楽しい時間を過ごしていた。小島さんは、過去に大病を患って入院をしたことが何度かあり、今回もお元気に復活すると誰もが信じ、そのような雰囲気でも小島さんに接していた。私たちにとっては、山に関する豊富な知識とその見識、穏やかで誰とでも分け隔てなく接する小島さんは、不屈の山岳知識人である。それからわずか10数日後の2月12日に小島さんの突然の訃報に接した。病院を元気に退院したばかりだったので、まさかと、俄かには信じられなかった。享年80歳でした。

○私と小島さんとの出会いは、1967年の栃木県山岳連盟ボリビア・アンデスの登山隊であった。その当時私は高校山岳部の生徒で、登山隊の報告に接し海外の山への憧れを身近なものとして感じた出来事だった。小島さんはその当時27歳の隊員であった。その後私が栃木県の高校教員として戻ってからは、小島さんとは直接的な関係を持ち、高体連登山部の行事に関わっていただき、栃木県山岳連盟、日本山岳会、日本ヒマラヤ協会、HAT-J、日本山岳文化学会などで大変お世話になった。また、海外の著名な登山家が来日した折には、小島さんに誘われて日光観光などにも同行する貴重な経験もさせてもらった。小島さんも大学山岳部のOBでもあったので、私との共通の友人や話題も豊富で

私にとっては登山の生き字引のような存在で大変かわいがっていただき、いつでも頼りになる兄貴的存在であった。私は一回りほど年下なので「ゆうじ」と気さくに声をかけられ、大変親しみを感じた付き合いが続き、お酒を口にしない小島さんですが、私たちの酒宴には必ず参加して酔っぱらいの話題に参加してくれたのはありがたく、稀有な存在だった。

○小島さんの登山人生の中で最も痛恨の極みであったのは、1981年秋のインド・ヒマラヤのナンダ・カートの遭難事故であろう。隊長の小島さんを除いて隊員7名が行方不明になったヒマラヤ登山史上でも未曾有の事故であった。たった一人現地で生き残った者としての苦悩はその後の人生に大きな重みとなって背負っていたことに違いないと思っている。今頃、あちらの世界で彼らと再開し当時の様子が解明されているかもしれない。

○「小島守夫さんを偲ぶ会」を有志で計画し、岳友や関係者に案内を差し上げたところ約150名程の参加申し込みがあった。コロナ禍の影響で日程を延期したりしたが、コロナ感染防止対策との関係で延期せざるを得なかった。最終的には、小島さんの蔵書を関係者に形見分けとして配布することで、小島さんの生前を偲んでいただくことにし、令和4年4月9日にやっと実現できた。

○亡くなってから約2年間、小島さんのご自宅にお邪魔して蔵書や山道具の整理をお手伝いさせていただいた。どれ一つとっても小島さんの人柄が偲ばれる思い出多き貴重な物ばかりであった。(合掌)

小島さんの思い出

長百合子

- 1990年2月4日、最初に小島さんに会ったのは新ハイキングの本部山行で北八の天狗岳です。黒百合平から普通は中山峠から尾根に行くのに、小島さんがストックを横にして膝で抑えて新雪を進む方法を教えて下さって、直接天狗岳に登りました。頂上から一緒に駆け下りたことを思い出します。
- 1990年5月27日新ハイキング本部山行で宿堂坊山に参加しましたら、又小島さんにお会いしました。あの頃は西の湖迄マイクロバスが入り、下山したら冷たいビールが飲めました。その足元の草を小島さんに尋ねましたらオオハンゴンソウと教えていただきました。一株取って東京の庭に植えましたが小さく、足利の庭に植え変えましたら育っています。

- 2007年8月19日栃木支部の入会初山行白根山に参加しまして17年ぶりにお会いしました。
- 2008年6月1日上田景子さんと私が小島氏に誘われて神長氏と一緒に八方ヶ原～大入道～学校平へ行き、ツツジの咲く道を歩いたのを思い出します。その時学校平の店で30cmのシロヤシオの苗を500円で買いました。今は未だ花芽をつけませんが、120cmに育っています。2つの植物が思い出になりました。
- 2020年1月26日役員会がコンセーレでありましたが、後の懇親会にはお酒が飲めない小島氏はいつも欠席されるのですが、その日は人が少ないからと懇親会に出席されました。今でもその時のお元気な姿を思い出します。



第8回山の講演会
『奥日光からシベリアへ
……アムール虎を追って』
講師の福田俊司氏と談笑する
【2014・12・14】



栃木支部総会
【2015・5・17】

◇◇◇ 追悼 故 坂口三郎氏 ◇◇◇

坂口三郎さんを偲ぶ

栃木支部長 渡邊雄二

坂口三郎(さかぐち・さぶろう)

会員番号 7973

1926年 福岡県若松市生まれ

1938年 福岡県立小倉中学校(旧制)

1943年 海軍兵学校(広島県江田島、第75期)
在校中に終戦

1948年 宇都宮市で水産卸事業を経営

1965～1981年 栃木県山岳連盟理事長

1975年6月 日本山岳会入会

1982～1999年 栃木県山岳連盟会長

1995～2001年 日本山岳協会会長

2001年 叙勲(勲四等瑞宝章)

2007年5月 日本山岳会栃木支部設立発起人

2021年11月20日 94歳にて自宅で永眠

○日本山岳会創立 120 周年記念事業として、「全国山岳古道調査」が始まった。栃木支部でも早速プロジェクトチームを立ち上げ、坂口三郎(本支部顧問)氏をアドバイザーにお願いした。快く引き受けていただき、毎回のミーティングには貴重な資料を提供していただいた。氏は県内登山事情に精通している登山界の重鎮であり、生き字引的な存在なのでチームにとっては大変心強い。昨年中の実施調査5回のうち、3回参加していただいた。

○3 回目の参加は 2021 年 11 月 14 日、会津西街道山王峠の古道であった。江戸時代の参勤交代の道であり、イザベラ・バートの「日

本奥地紀行」の道でもある。この日は秋晴れの気持ち良い一日で、落ち葉を掻き分けいかにも古道を歩くといった感じであった。氏も一部だけ一緒に歩き、調査隊の下山を待つ間には会津の史跡を巡り、地酒を購入して晩酌を楽しみにしていた。帰りの車の中では次の調査山域についてのおしゃべりをしながら、楽しそうに帰途についた。よもやこの山行が氏の最期の山行になるなどとは思ってもよらなかった。亡くなる6日前のことである。

○氏は福岡県生まれ、父親は鹿児島出身でその後の経歴もまさに九州男児である。海軍兵学校に在校中に終戦を迎えたので、海軍関係者との交流も濃密なものがあつた。終戦後、海軍兵学校から一度父親の出身地である鹿児島に復員し、その後宇都宮市で水産卸事業の経営にあつた。

○氏の山登りは昆虫採集から始まった。1998年のムスターグ・アタ登山隊に総隊長で参加した際には、「私の少年時代5歳から17歳まで、昆虫採集に明け暮れた」「中国・西域の異国の蝶や、BC 近辺での高山蝶との出会いが、楽しい夢として膨らんでいった」と記している。

○宇都宮市に来てからは地元の宇都宮山岳会に入会し、趣味の登山を本格的にはじめた。1975年には、織内信彦氏と原 蕃氏の紹介で日本山岳会に入会した。その後、栃木県山岳連盟理事長と会長の重責を背負い、栃木県の健全な登山の発展と登山文化の発展に寄与した。

○1995年からは懇願されて、日本山岳協会会長に就任し、組織の改革と発展に尽力した。それまでの会長職は中央の著名な方々が就任されていたが、氏は最初の地方岳連出身の会長となり、宇都宮～東京を新幹線で足繋ぐ通っていた。会長職退任後は、多くの岳友と各地の登山や海外トレッキングなどを楽しみ、山登りはいつも身近なものであった。

○私と坂口氏のお付き合いは、私が高校山岳部の時に理事長をされていたので55年の長きにわたる。この間私は氏からは「雄ちゃん」と愛称で呼ばれ公私共々大変お世話になった。栃木県で開催された国民体育大会山岳競技、全国高校登山大会、県山岳連盟の記念行事等の成功は氏の尽力によるところが大きい。日本山岳協会会長の時に発生した文部省登山研修所の大日岳での遭難事故では、会長自ら捜索活動に参加して除雪のためにスコップをふるった。

○日本山岳会の活性化のために支部設立の機運が高まった折、故日下田實氏らと一緒に栃木支部の設立に尽力し、今の栃木支部の礎を築いた。その後、支部山行や行事には特段の用事がない限りはいつも参加された。

○氏が80歳後半の時、薬師岳にご一緒した。太郎平小屋の五十嶋博文氏の歓迎を受け古き良き時代の山談議に花が咲いた。就寝時には着衣をきちんと枕元にたたむのは海軍兵学校からの習慣であろう。いつでもどこでも氏から学ぶものが多い。氏の生き方は、私の目標、理想でもある。

○自然を愛し、山登りを続け、楽しい酒を嗜み、多くの岳人と交流を深め、生涯現役だった坂口三郎さん、またどこかでご一緒できることを楽しみにしています。 合掌



最期の山行になった会津西街道古道調査(前列左から二人目)【2021.11.14】

北九州支部の関口興洋氏からお手紙をいただきました

令和4年3月31日

日本山岳会栃木支部
支部長 渡邊雄二様

日本山岳会北九州支部
関口興洋

拝啓

全国支部懇談会では大変お世話になりました。

北九州支部の関口です。突然、お手紙を差し上げますことお赦し願います。

日本山岳会の月報「山」3月号で坂口三郎さんの追悼文を拝読し、坂口さんの思い出を少し綴らせて頂きます。

私は坂口先輩の母校、旧制小倉中学校の後継である小倉高校の卒業生です。昭和29年に入学しましたが、校舎は明治の末に建てられた木造平屋建てのオンボロ校舎でした。私たちが旧制中学時代の校舎で学んだ最後の学年でした。

3年前、日光で開催された全国支部懇に出席し、翌日の中禅寺湖畔のイギリス、イタリア大使館の別荘めぐりが終わった後、坂口さんから日光駅まで車で送ってやるよとの有難いお言葉を頂き、同乗させてもらいました。

戦前、海兵や陸士に進学する生徒は優秀な方だと先生からよく聞かされていたものです。90歳を過ぎても矍鑠として車を運転される姿に感動しながら、道中小倉時代の懐かしい思い出を語って下さいました。

いずれ、小倉にも行きたいので、その節は浦島太郎の案内を頼むよとのことでした。「現在、古い校舎は全て建て替わっており、昔の面影はありませんが、場所は昔のままです。日下田さんがお元気なころ、北九州支部の総会後の記念講演の講師として小倉にお越しになったこともありますので、お待ちしております」と申し上げたのが懐かしく思い出されます。

坂口さんの訃報を知ったのは、今年1月に入ってから神崎忠男さんから伺いました。あれほどお元気な様子だったのに、あまりに突然のことで信じられませんでした。

思い出の一端をご披露し、ご冥福をお祈り申し上げます。合掌

敬具

- 私が栃木支部に入会した時点で、彼は80歳をゆうに超えていました。
- いつも穏やかで、丸く包みこむような方でした。最も歳を重ねた方の余裕なのでしょうか。
- 山行の時も、山登りの辛かったことや苦しかったことなどは殆ど言われたことがなく(私は相手にならなかったのかもかもしれません)、そのかわり山での面白い話や、弟さんが単独登山で死亡したこと、奥鬼怒の登山は昔はいろは坂の方から登ったこと、それが今では考えられないほどの道のりだったこと等々。そして女性からの告白。少し照れるような、恥ずかしいような、思わず素敵なお方だなど思ってしまう一齣(ひとこま)でした。
- 歳を重ねても、歳の差を感じることなく、共に居られる方で感謝しています。
- 私が虫が苦手と知ると、その虫を自宅で飼っていることなど話していただきました。思い出はたくさんあります。
- ご冥福をお祈り致します。



坂口さん、お世話になりました

仙石富英

- 昨年11月の福島県境の山王峠の古道調査の際は、坂口さんに乗せて三依塩原温泉口駅集合で、古道調査を行い、帰りも自宅までお送りしました。ご自身は、山王峠を歩いている調査は行いませんでしたが、付近の調査を行い、同行の長会員達と昼食をとり、帰りには晩酌のお酒を購入して自宅までお送りしました。その後1週間もたたないうちに、JMCSA 小野寺専務理事から坂口さん逝去の問い合わせがありました。そのことを全く知らず、想定外の事で驚き以外の何物でもありませんでした。一昨年の小島さんご逝去の時もそうでしたが、お亡くなりになる直前まで接していた私としては、命のほかなさをつくづく感じた時でした。
- 坂口さんには、私が職場の山岳部で活動し、第55回栃木国体に競技役員で参加、その後、

山岳連盟事務局の事務をするようになってから40数年の間、その間、私が日山協(JMSCA)理事になってからも、ご指導をいただきました。

- 日本山岳会入会の際は、入会をためらっていた私に、坂口さんの推薦で当時の今西会長にも推薦者になっていただき、会員になった思い出があります。
- 坂口さんからは、栃木岳連設立時や全日本山岳連盟(後の日本山岳協会)設立時の状況を教えていただいたりしましたが、坂口さんの人脈や記憶力には脱帽ものでした。本当に登山界の生き字引のような方でした。頭の中は、歴史書のような貴重な情報で一杯だったのでなかったかと思うと共に、どの程度記録として残していただけなのかと思っています。
- もう少し一緒に山の事ができたらと残念に思うこの頃です。お世話になりました。

合 掌

追悼 坂口三郎さんを偲ぶ 蓮實淳夫

- 坂口三郎さんとのお付き合いは実に長かったです。
- 私が栃木県山岳連盟の常任理事として岳連事務所に顔を出すようになった時、坂口さんは栃木岳連の理事長をしていました。
- 当時、私は矢板岳友会と高体連登山部（矢板高校山岳部顧問）の二足の草鞋を履いて活動していましたから、坂口さんと行動を共にしたことは数え切れない程ありました。その中から、国民体育大会山岳競技について思い出すことを幾つか述べてみたいと思います。
- 昭和 52(1977)年第 32 回国民体育大会は「あすなる国体」のスローガンを掲げ青森県で実施されました。山岳競技の会場は黒石市・十和田湖町・八甲田山系でした。
- 山岳競技の内容は縦走競技と踏査競技でした。坂口さんは、日本山岳協会の役員をしておられ、この競技のルール作りに深く関わっておられました。一方、私はこの時、山岳競技の栃木県監督でした。監督は各県一人でしたから、私ひとりで成年男子・少年男子・少年女子の三チームを引率しました。
- この年、栃木県高体連登山部は夏休み中にカナデアンロッキーに 3 週間遠征しており、私もその登山隊の一員でした。帰国して直ぐ、小島守夫氏にコーチになってもらい、栃木県の選手全員を連れて北八甲田と南八甲田の山へ下見に行きました。
- 秋の国体本番では、成年男子が踏査競技で優勝し、少年男子は総合で 2 位になり、少年女子も総合で入賞しました。この時は、坂口さんも大変喜んでくれました。
- 私事ですが、この年、栃木県体育協会会長（栃木県知事）から優秀監督賞を授与されました。

- 昭和 53(1978)年第 33 回国体は「やまびこ国体」のスローガンの下、長野県で実施され、山岳競技の会場は戸隠山でした。審判長は坂口さんで、私は少年の部の審判を担当しました。ですから、大会前に何度も戸隠へ行き、コースの下見で飯綱山に登ったり、審判要領の読み合わせ等を行いました。この時、毎回坂口さんの車に乗せて頂きました。坂口さんの運転技術の高さには感動させられました。但し、審判業務は凄く大変だった記憶があります。
- 昭和 54(1979)年には栃木国体のリハーサルを兼ねて、日光山系で全日本登山大会が開催され、私は選手として参加しました。
- 昭和 55(1980)年第 35 回国体は「栃の葉国体」と称し、山岳競技は日光山系で実施されましたが、縦走・踏査に加えて登攀競技もありました。
- 私は審判員で、担当した山は鳴虫山でした。現在は、山岳連盟の名称も「栃木県山岳・スポーツライミング連盟」になり、活動内容も大きく変化して、坂口さんが心血を注いだ国体山岳競技もなくなりました。
- しかし、私にとっては、坂口さんと行動を共にした国体山岳競技の体験は人生の宝となっております。坂口三郎さん、ありがとうございました。 合掌



坂口さんの思い出 長 百合子

- 2014年9月13日、栃木支部の秋山行で富山国立登山研修所に泊まりラムサール条約の天狗平を歩いた時、坂口さんの体調が悪く少ししか歩かない事で私が坂口さんを意識した初めです。
- 2016年冬山行は足利の行道山～両崖山～織姫神社のコースを坂口さんトップで歩きましたが、両崖山に行くところは階段で嫌な所ですが、着々と歩かれましてFさんの足がつったとかで、もみじ平過ぎで二人は大分待ちました。先日行道山に登った時階段が多くもう行くのを止めようと思いましたが、その時の坂口さんは90歳でした。
- 2017年4月8日春山行の鶏足山～焼森山の登山口まで車で行きましたが、雨が降ってきて、前にこの山には登っているので、早川さんと坂口さんも登るのを止めました。逆川館に戻り、雨が止みましたのでミツマタの谷に行き、一回りしまして坂口さんから写真を撮っていただきました。
- 2017年8月20日夏山行の明神岳は、私は1999年12月4日の雪山を国道249号線から登り、時間が掛かったのを思い出しまして、皆さんが加仁湯の朝食を摂り、バスで夫婦淵に出て車で裏登山口から登るのを、天気も悪く私は行く気持ちが無くなり、坂口さんとゆっくり登り、昼食をとった後に皆さんが途中で戻ってきました。
- 2018年6月22日全国支部大会の北海道支部担当で、層雲峡に行きました。私は北海道高校時代の親友が旭川と先生が札幌に居ますので、会う目的もあり自家用車で参加しました。層雲峡に登る日は朝から雨で、昔登った時頂上前面にエゾコザクラが咲いてい
- ましたが、地元の方が今年は遅れていると聞きまして登る気持ちが無くなり、坂口さんと滝が見える所などご一緒しました。
- 2021年7月11日古道研究下見で沼原集合の時、格好良いスポーツカーを運転して来られ板室宿などを見学される予定で、我々と別れました。
- 2021年11月14日古道研究下見の山王峠に参加しましたが、車から降りた坂口さんが両杖を突いているのにちょっと驚きました。7月から見れば、暑い夏を過ごして少し弱ったかしらと思いました。横山宿を見て、横山駐車場で皆さんと別れました。2018年私は山王峠から帰ったら百姓屋の女将さんが「キノコ汁を食べな—」とご馳走してくれた事、イナゴの佃煮を買ったのを思い出して、イナゴの佃煮を買いましたら、坂口さんも一寸味見をして買いました。キノコ汁をご馳走になり道の駅田島に向かいました。
- 皆さんは未だ来ないと思い、次の道の駅などに行こうと車を走らせましたら、坂口さんは会津高原尾瀬口駅に降りてすたすたと歩き、日本酒1升瓶を買いました。その食堂で昼食を摂ることにしまして坂口さんは暖かいキノコ蕎麦を注文してきれいに平らげました。田島道の駅に戻り、皆さんが到着して記念写真を撮り上三依塩原温泉口の駐車場で解散しました。最後まで坂口さんにご一緒出来て良い思い出になりました。上田さんから奥様の着物を頂いたので、晚餐会に着て坂口さんにお見せしたかったです。

◇◇◇ お二人の追悼 ◇◇◇

人生のコンチェルト

偉大なる先輩に捧ぐ 桑野正光

○小島守夫氏が亡くなり、さらに坂口三郎氏が旅立ち、その上、会員ではありませんでしたが畏敬する朝倉守之助先生も鬼籍に入られました。心の空白が塞がりません。登山そのものばかりでなく、登山を通して人の在り方を学ばせていただいた方ばかりです。

○お亡くなりの方々が登山活動を始めたのは、やや年齢の違いはあっても、昭和30年代からです。昭和33年のマナスル初登頂、同じ年、ルート紹介や道具解説などの登山の専門書『岩と雪』が発刊され、世は高度経済成長への前兆が見られるころです。多くの登山者が、夜行列車で信濃四ツ谷（現白馬）の駅に降り立ち、その後、昭和40年代からはダークダックスの歌とともに登山ブームが到来し、「遙かな尾瀬」に多くの人が訪れた時代です。

○一方で、同じ昭和33年は月刊雑誌『アルプ（フランス語でアルプスの意味）』が創刊された年でもあります。登山家であり哲学者の串田孫一を編集長として、版画の畦地梅太郎、詩人の尾崎喜八、作歌の深田久弥、写真家内田耕作など斯界を代表する人たちが執筆し、一切の広告を載せず、コースガイドや山道具の解説などありません。登山と芸術の融合を図ろうとした月刊誌です。北海道斜里町の「北のアルプ美術館」に全巻揃っています。

○3人の方々は、今はどちらも廃刊になっている『岩と雪』と『アルプ』の対照的な両面を享受出来た希有な世代と言えます。登山を「文化」として実践し得た方々です。

○小島氏と坂口氏には共通するところは、他県出身でありながら、栃木県人以上に栃木県に貢献し、多くの知己をお持ちでした。自分のことよりも他人のことを気遣い、組織

の長となっても決して武張って自己主張を通すことのなかったことも共通でした。

○小島氏は酒を嗜まないのに、酔ってやかましく騒ぐ人たちの中でいつも笑顔を決やさず、最後まで席を立ちませんでした。ただ、酔わなくとも、本の話をするときの顔は、万年青年のようにロマンに満ちていました。定年退職後に、専門の養蚕の技術普及のためネパールに出向したことなども、他人に貢献することを当然とする小島さんの人柄そのものです。東北人の粘りを見事に体現した人生でもあったと思います。いただいた本は未読のままです。

○坂口氏は海軍仕込みのジェントルマンの典型です。己を犠牲にしても他に尽くす海軍魂が生き方の根底に存在していたのでしょう。終戦という挫折を乗り越え、北九州から遠く離れた栃木の地で事業を興すに当たっては辛苦もあつたに違いありません。しかし、苦労の跡を微塵も見せず、磨き上げられた経験が後年の高潔な人柄に繋がっていることと思います。

○また、博覧強記、栃木県の歴史などにも精通して、最晩年まで向上心を絶やさず、古道調査に当たっては備忘のため小さな手帳にメモをしていた姿が印象に残っています。

○亡くなる直前まで後輩を気遣ってくださっていた懸案事項については、御遺志を無にせず、もう少し頑張っていきますので見守っててください。有難うございました。

○朝倉先生を含めて、『岩と雪』と『アルプ』の同時代を生きた3人の先輩は、単に登山の先輩というだけでなく、心と体のハーモニーがとれた、人生の先輩として尊敬する方ばかりです。ご冥福をお祈りし、それほど先でない時期に再会しますので、先輩としてあの世とやらの生き方を御教授願えることを期しながら、お別れ言葉とします。

合 掌。

坂口さん、小島さんを偲ぶ

仲富正子

- 栃木支部での活動と懇親会では、お二人の偉業を存じ上げないで、山仲間として接しさせていただき、失礼があったのではと思ひ悩んでおりますが、思い出を綴らせていただきます。印象的な山行は、平成23年・24年の夏山と平成26年の秋山です。
- 加仁湯温泉に宿泊するのが定番の夏山、何か新しい企画を探していた折に、小島さんの案内で赤岩滝と湯沢噴泉塔への山行が加わりました。どちらもメジャーなハイキングルートではなく、言わば玄人好みの所です。初めての渡渉体験、夏場ということで冒険的なコース、私はワクワク楽しかったです。24年に同じコースを坂口さんが参加されました、勿論馴染み深いコースである事を道々お話しくささいました。
- 7年半前になる秋山山行は、国立登山研修所を拠点に、弥陀ヶ原の散策班と雄山登頂班と剣岳登頂班と3班体制で、現在の各々の体力に応じたコースが設定されました。更に夜の懇親会や、最終日の黒部峡谷トロッコ電車の旅など、目まぐるしい日程が組まれておりましたが、淡々とこなされていた坂口さんは怪物とも思えました。

- また、末席ながら（現在名称）「一般社団法人栃木県山岳・スポーツクライミング連盟」でもご一緒させていただきました。私達の先の先を歩まれていたお二人、ほんとうの強さ、優しさ、暖かさに助けられたこと……素敵に年を重ねられたお二人に尊敬と憧れが耐えません。
- ご冥福を心からお祈りします。

奥鬼怒の湯沢噴泉塔にて
【2012・8・25】



栃木支部秋山山行 室堂にて【2014・9・14】

お二人に哀悼の意を捧ぐ 神島仁誓

- 小島さん、坂口さんとは、登山道を歩きながら、また小休止の時に、あるいは各所各処での懇親会の折に、いろいろな話をしたことが思い出されます。過去の山登りの話はもちろんのこと、登山には直接関係のない話もしました。ひょっとすると後者の話の方が多かったかもしれません。それはまさにお二人の尽きることのないご見識ゆえに、会話の話題が幅広く、多岐にわたったのかもしれませんが。
- 小島さんのお付き合いは、高体連登山部の大会が端緒であったと記憶しております。その後も登山大会や講習会があるたびに参加していただきました。だから岳連の方というよりも、殆ど身内の高体連の顧問かなと思うほどお世話になったことです。さらには懇親会等にも顔を出していただきました。なにせ一昔前の登山専門部の懇親会といたら、各顧問が持ち寄った差し入れのお酒の本数も半端なかったのですが、それを全て飲み干すまではお開きにならないといった有り様でしたから、覚悟を決めての長時間の飲み会となるのが当たり前。皆さんがおっしゃっているように、お酒をお飲みにならないのに、嫌な顔をせずに、いつも最後までおつきあいいただきました。
- 数々の会話の中で、今でも印象に残っている話題があります。小島さんは県庁職員を辞してからその技術を活かすべく、国際協力機構(JICA)から派遣されて、養蚕業の技術を伝えるためにネパールやインドに出向されました。私が大学でインド史、特に南インド史をかじったことを知っておられて、自らの派遣地である南インドのチェンナイ(旧マドラス)やバンガロールの話をしてくださり、よく盛り上がったものでした。また当地においても養蚕技術が進歩してきて、かなり高品質の繭がとれるようになり、横糸になる生糸はいいものができるようになったが、縦糸となる生糸はまだ強度が不十分で、当地の産業振興のためには何とかこの点を改善した

いとおっしゃっていたのが印象的でした。さらには縁ができた方の家の結婚式に招かれて、わざわざ日本から南インドまで赴いたことなども楽しそうに話されていたことが思い出されます。

- 坂口さんとは、やはり高体連登山専門部の大会や、国体の山岳競技の県予選会での邂逅が最初であったと思います。いつも冷静に、言葉を選ぶように話された姿が思い浮かんで参ります。
- 坂口さんとの語らいを振り返ってみると、一番印象に残っているのは、ご自身の青春時代の多くの時間を捧げた海軍兵学校の話でした。実は私の父が戦時中海軍で、重巡洋艦『高雄』の機銃手であったので、それをある時お話しすると、よく海軍時代のことを語っていただきました。
- 突然雲間からグラマンが現れて機銃掃射してくるので、耳栓もつけずに慌ててそれに対抗して機銃を撃ったので、その掃射音のために父の片方の耳が聞こえずらいこと。グラマンの落としていった口径25センチほどの薬莢が家にあること。南洋の港湾に停泊中に、『高雄』の艦長が山本五十六連合艦隊司令長官の乗船している艦艇に挨拶に出向いた時に、父が随行兵としてお供をし、山本長官に敬礼をしたところ、それへの返礼として敬礼をしていただいたこと。こんなことを話すと、喜んで耳を傾けていただきました。
- 坂口さんは、晩年になってシルクロードを尋ね歩かれたのですが、私も高体連登山部の遠征でも何度か訪れた場所でもあり、共通の体験をしたことになるので、お互いに相槌を打ちながら話に花が咲きました。
- 今にして思うと、お二方との折々の語らいは、何ものにも代え難い、珠玉の一瞬々々であったに違いありません。かけがえのない沢山のお言葉を有難うございます。もうお話しできないのは残念でなりません。哀悼の言葉は尽きません……。
- お浄土での日々、娑婆と同様に我ら縁のある者をお導きください。合掌。



有志懇談会：栃木支部設立の準備を進める
ことが確認された
【2007(平成 19)年 1 月 14 日(日)】



栃木支部設立祝賀会
【2007(平成 19)年 5 月 27 日(日)】



設立総会で役員を紹介する渡邊事務局長
【2007(平成 19)年 5 月 27 日(日)】



第 3 回三支部合同懇親会 筑波山神社前
【2010(平成 22)年 2 月 7 日(日)】

第3回三支部合同懇親会 筑波山下、筑波山山頂
【2010(平成22)年2月7日(日)】



(社)日本山岳会栃木支部夏山山行
鬼怒沼にて 2009. 8. 30



鬼怒沼への急登を登る
坂口さん
【2009(平成21)年
8月30日(日)】



秋山山行 室堂にて
【2014(平成26)年9月14日(日)】



袈裟丸山頂にて
【2012(平成24)年6月10日(日)】



